

応化会だより

昭和48年7月 第15号

石川平七先生を偲ぶ

早稲田応用化学会



石川先生略歴

- 明治 39年 1月 5日 新潟県三島郡出雲崎町にて出生
大正 9年 4月 上京，赤坂中学校（現日大三高）入学
13年 4月 早大第一高等学院入学
15年 4月 早大理工学部応用化学科入学
昭和 5年 3月 同卒業，小林久平先生の下で研究
9年 4月 早大理工学部教務補助
12年 4月 同 助教授
12年 10月 仙台市野砲隊に応召
16年 10月 陸軍燃料廠研究部に応召
19年 1月 大学復帰
28年 4月 早大理工学部教授
35年 3月 工学博士
39年 2月 早大理工学研究所長
44年 5月 早稲田応用化学会会長
48年 2月 10日 東京女子医大病院にて脳硬塞にて逝去 享年67才
勲三等瑞宝章を授けられる。

弔 辞

早稲田大学

総 長 村 井 資 長

早稲田大学教授 工学博士 石川平七先生の御霊に対し、先生がその生涯を大学で過ごされ、学生の指導、訓育と学界のために尽された足跡を追憶し、深甚なる謝意を表するとともに、ご遺族に対し、衷心から哀悼の辞を申し上げます。

先生は明治三十九年一月新潟県出雲崎に御生誕、昭和五年早稲田大学理工学部応用化学科を御卒業、兵役を終えて、昭和九年大学に迎えられ、今日迄はほぼ四十年の長きにわたって、早稲田大学の教壇にたたれ、研究室にあっては、多方面の研究成果を挙げられ、学界ばかりでなく、産業界にも多大の貢献をされました。

先生は真からの善人、真面目で、懇切でしかも越後の人独得の人柄、不屈、不撓の精神の持主でした。先生のこの責任感が強く、自分自身のことを忘れて、教育のため、研究のため、人のためにいちずに取り組みれるという性格が、先生御自身の身体をいとうということをしなかつたため、まだ五年もさきの、定年をもたずにこの地上を去られたのではないかと思われ、悔まれてなりません。

しかし先生の温容と人柄に接した、多くの卒業生と学生は、生涯先生を忘れることなく、良き師表として仰ぐことを信じております。

先生は大学に対して学問的な業績と人格的な教育成果を遺されただけでなく、理工学部において、応用化学科主任、理工学研究所長としても大きな功績をたてられました。殊に応用化学科に化学工学系の教育・研究体制を築かれたのはその功績の最も大きなものと言えます。古くは専門部工科講師、高等工学校工業化学科主任として尽されました。また工業化学関係諸学協会の理事・評議員としても活躍されました。

先生はいま親しい大学の同僚後輩を置いて先立たれました。しかし先生の足跡は、早稲田の森に永久に生きつづけるであります。

ここに永遠の旅立ちをお見送りするにあたり、在りし日の俤を偲び、ご功績と貢献を想い、早稲田大学を代表して、深甚なる感謝の念を捧げ、偏えにご冥福をお祈りいたします。

昭和四十八年二月十三日

なき恩師石川平七先生を思う

応用科学科教室 主任

城 塚 正

昭和19年大戦末期に応用化学を卒業した私は、当時陸軍燃料廠研究部から召集解除され、大学の研究室に復帰されたばかりの石川先生の下で大学院学生として研究生活を歩き出した。以来先生の御指導下に育てられた私にとっては、今日先生の御死去にあってみると心の中にポツカリと穴が開いた思いである。常に変らぬ心の暖かさと寛容さに包まれていたときは、その有難味も忘れ勝ちな日常であったが、先生なき今日、しみじみと懐しく思われる。

先生は明治39年1月5日新潟県三島郡出雲崎町に生れ、昭和5年早稲田大学理工学部応用化学科を卒業された。この間は相当に御苦勞をされたことは日頃の先生御自身のお話しにもよくでてきたことである。このことはおそらく先生のお人柄が作られた過程で大きく働いたものと思われ、人に頼まれれば断れないこと、人の面倒みのよいことなどにみられる心の豊かさがこれによって培われたものであろう。応用化学科卒業後昭和9年理工学部教務補助として奉職され、昭和12年助教授を経て、昭和28年に教授となられ、昭和48年2月10日御死去まで実に39年間にわたる長期間一貫して、研究と教育に専念されたのである。

先生の研究は、応用科学科の創立者である小林久平先生に強く影響され、また小林先生の後継者の一人であると考えられる。初期の研究は当時の小林先生、山本先生の研究の中心課題であった酸性白土の研究から始まっている。すなわち白土添加石炭の乾留、炭化水素の白土の触媒効果、石蠟の接触分解などの一連の白土触媒の応用研究が工業化学会誌などに見られる。そのほか白土の呈色反応、中性塩分解反応などの基礎的な研究も行なわれた。これらの研究は当時の必須の物質であった航空燃料や航空潤滑油の製造法の開発に指向したものであろう。昭和16年に陸軍燃料廠から召集解除後は長期の展望にたった系統的研究を開始されたようである。すなわち化学工学上の基礎的研究として、濾過層の研究が始められ、また白土研究からの延長線上に膠質土に関する基礎と応用研究が加えられた。濾過層の研究はその後濾過助剤や脱水操作の研究などに展開したが、本格的な研究へは実らなかった。これは他の主要テーマの膠質土の研究へ殆んどの精力が注がられたためのように思われる。膠質土については昭和35年に「膠質土及びその接触的作用に関する研究」で工学博士号を取得され、その本体と物理化学的性状、吸着作用、接触作用をほぼ集大成された。その後現宇都宮大学の田中甫君を指導され、膠質土から耐火レンガの製造、腐硫酸ピッチの処理法、アルミナ製造法などその応用研究を拡

大された。さらにその後研究室の大学院学生によって、膠質土よりのゼオライトやドーソナイトの合成研究が継続されていた。この一連の研究は資源の乏しいわが国における、未利用資源の活用という先生の研究上の哲学を实践された美事な成果であると思われる。

他方先生の教育上の寄与については、先生の円満なお人柄からよく学生を指導され、多数の優秀な卒業生を研究者、技術者として世に送り出された。教育行政面では早稲田大学付属高等学校化学工業科教務主任、応用化学科主任、早稲田大学理工学研究所長本学高議員、評議員などを歴任され、大いにその行政的な力働を發揮された。

先生の訓育は在学中の学生のみならず、卒業後もよく面倒を見られ、先生の御媒酌によって結ばれた卒業生は70組以上にのぼるのであり、正月には高円寺の先生のお宅は年始の卒業生にいつも占領される始末であった。教育への情熱は御死去の直前まで、御病身にもかかわらず、博士論文の審査や、試験やレポートの採点などに精力をそそがれておられたことを今は感銘深く思い出すのである。

一方学外の活動は公職としては、通産省中小企業庁の振興審議会や近代化審議会の専門委員を長くお務めになり、専門の知識を広く活用された。また学会においては、専門学会である化学工学協会の理事や編集委員など多数の役員を歴任された。最近物故された学会の最長老の一人である八田四郎次先生とお会いすると何時も「石川先生はお元気か？」と尋ねられたものである。

最後になったが、先生は御死去まで応用化学会の会長をお務めであって、ここ数年はこのお仕事に力を入れておられた。お人柄から常に卒業生の諸氏に頼りにされておいであり、名会長と名を残された。このように筆を進めてくると今更のように先生の温容が思い出され、涙溢るる思いで一杯である。

三ツの世を道一筋に生き抜きて

君安らかに浄土の旅へ

淋しさにたえがたき日は白き花

匂へる狭庭に夫つま思い居り

いつしかに雨は滴となりけり

夜の更けゆくに夫の恋しき

石川君

昭和48年4月20日夜大隈会館において石川先生追悼会が開かれました。先生の御写真をかこんで、御遺族、御友人、門下生、卒業生など100余名が集まり、御生前の先生を偲びました。山本研一先生、神原周先生、それに長い間石川先生の下で研究を共にされた田中甫先生（現宇都宮大学教授）からつぎのようなスピーチがありました。

山 本 研 一 氏

石川教授と私との交友は、もう四十数年、まだ石川先生が学生時代からの長い長いおつき合いでした。それで、石川教授について申し上げたい事は、非常に沢山にあります。どれから申し上げていいか、わからない位であります。その内の、ほんの1～2、思い付いた事を申し上げて、私の責をふさぎたいと思います。

昔、昭和の初めに、まだ小林先生が、お元気な時代——小林先生もやはり石川先生と同じ越後の方で——石川さんとある点でよく似ておられたように思います。そのことは新潟のあの厳しい風土に、しかも明治という時代に、育ったせいかと思うのであります。現在、総理の田中角栄氏にも、その気風がうかがえると思います。驚く程の忍耐、克己心を堅持しておられます。これは、やはり或程度、風土の影響というものが認められるのであります。私がまだ駆出しの助教授の時代に石川さんにはいろいろ研究やほかの仕事を手伝って載きました。ともに小林先生のもとで、昔の酸性白土だとか、鹿沼土だとか、そのほかいろいろな土類の研究やその活性化の研究を手伝ってもらったのであります。実験研究に当たっても私なんかは、無精者ですから、そう綿密に、はしからはしまで完全にやると言う事は出来ないの、見当をつけて、とばして、実験しがちであります。石川先生はその点は、本当に研究に対しても、飛躍的な考えを出すというのでは無く、非常に地道にやって来られました。まあ、その性格があらゆる処に出ておったと考えられます。その後、石川さんが、いろいろな会で、スピーチされたりする時でも、またいろいろの雑誌に書いておられるものを拝見しても——特に早稲田応用化学会の会長として、会報に巻頭言をよく書いておられました——それらを拝見いたしましても非常に地道な誠実な書き方をしておられることがわかります。

次に、先日、城塚教授からの話によりますと、石川先生は、結婚式の仲人を70何回も済ましたと言う事です。これも石川さんへの信頼の現われだと1つの驚きでありました。また学生生活の最後の仕上げの卒業論文ということになりますと、我々教師側は学生が多く来すぎても困りますので、あまり赤字が沢山あるような学生は、適当に敬遠するのであります。その点、石川さんは、いつでも、そおゆう方までも引受けて、それで論文の審査の時などになりますと、いつも色々弁護されるので、いろいろ逸話が残って居ります。

要するに石川さんは、昔の言葉でいうと、非常に律義、今の言葉でいいますと、誠実一方な方で、飛躍的に、才気煥発と言うタイプではありません。しかし、そのかわり間違い無く、一步一步着実にやって行き、どんな仕事でも嫌がらずに、我々ならば、すぐ敬遠して断ってしまう事でも、頼まれますと、どんな事でも引受ける先生の性格から推して、最後の御病氣中にも、いろいろの仕事を気にかけ、誠実に完遂するために、最後のエネルギーまで消耗されたのではないかと臆測するのであります。

私も4年前に、70の歳まで生きまして、やれやれという思いで、これから先はひとつ自分の思う俵の生き方をしてみたいなどと、けしからん事を考えてきました。その点、石川さんは最後まで全力を尽して、あらゆる人から頼まれた事は、きちんとすましてこられました。本当に敬服する次第であります。石川先生にはまだ定年迄、何年も残って居りますのに、またこれからさきにも沢山の仕事があったでしょうにと、かえすがえすも残念なことであります。

人間観としては、いろいろな考え方がありましようが、現職に、倒れるまで仕事をし世のため、人のために最善を尽くすこと、これは最高人間として、立派に人生を生きた事ではないか、という思いにうたれるのであります。以上、私の感想を申し上げた次第でございます。どうか石川先生の立派な御生涯を偲んで奥様や御子様方、皆様方が、お元気で御幸福であります様に、お祈り申上げる次第であります。

神 原 周氏

私、石川先生と申し上げる筈でございますがどうしても私は石川君とか石川さんとか長年呼び合っておりますので或は失礼な言葉が出るかもしれませんがお許し戴き度いと存じます。

丁度大正の末、震災のあくる年かと思いますが、早稲田の高等学院に入りました時から石川君とずっと一緒に勉強してまいりました。石川さんは非常に数学の良く出来る方でありまして私はいろいろな点で石川さんに、そういう事の面倒をみていただきました。今、村井先生もそういうお話でありましたが、私も度々石川さんに、数学の分らない事を教えてもらいました。先程山本先生のお話にございましたように新潟から出ておいでになったばかりで、その真赤な丸い顔でキョロキョロして張切っておられた、結襟の服を着て早稲田に入ってこられた石川君のその姿というものは今もはっきり思い出せるのです。

私それからずっと大学も一緒にいろいろな点で親しくつき合ってまいりましたけれど私が教わるばかりでございました。卒業後私は東京工大に勤めるようになりました。何と申しましても東京工大に早稲田からまいりまして他流試合であります。そこでいろいろな辛いこともございましたけれどもそれを心から慰めてくれたのは石川君でありまし

た。私はいつもその嫌なことがあったり辛いことがありますと、石川君を呼び出しておでん屋でちびちび飲み乍ら石川君に慰めてもらった。石川君は実に何と申しますか、誠実な皆様のおっしゃる通りの立派な方でありまして、しかも非常に心やさしく私の本当の心の奥の奥まで察して慰めてくれたのであります。

先日私は久留米のゴム会社の連中を集めていろいろな相談をする仕事がございます。久留米のホテルに泊って居りました時に大学から石川さんが亡くなられたと言う電話を夜おそく受けました。そして明日がその告別式だという電話をいただいたのであります。もうその翌日はそのいろいろな仕事のスケジュールを全部たてて場所の設営等も終わっております。すぐ飛んで帰りたいと思ひましてもその出来ない状態にございました。その電話の訃報を聴きまして私は浮世の切なさが身にしみそのホテルで一人一晩泣き明かしてしまいました。

そのような石川さんと私はいろいろな点で逆な反対な性格が非常にあると思ひます。私は何と申しますか、八方破れでありまして言いたいことは言い人の嫌がるような毒舌を振るい或は感情に走り、全く石川さんとは逆な性格であったからこそあんなに親しくお付き合いが出来たと思ひます。唯残念なことには今迄一回も石川君と私は喧嘩をする機会が無かった、喧嘩の出来ない様な相手でありました。その点私は何と申しますか本当に大切な自分の心の宝を失ったというような淋しさが今でも心の中に大きなほら穴となって残っております。

数年前京都で日本化学会の年会有りました時石川さんと他の先生方も一緒にいらした方もありますが、京都大学の近くの百万遍のお寺に宿をとられました。そこに今此処にいらっしゃる奥様とご一緒にお泊りになってる。その石川君はこまかく気をつけて非常にその奥様を大事にされるのですね。私はそれを見て大へん驚き羨ましく思ひました。私はいつも忙しい忙しいと言って飛び歩いておりますがそういう席に女房をつれて行ったことが一度もないんですね。それも石川君に学ばなければいけないと言うことをしみじみ考え直している処でございます。先日も石川さんの奥様に懇々と説諭されまして「もうあまり、その働くばかりではなしに奥さんも大事にして上げて下さいよ」ということをおっしゃられたのです。考え直さねばいかなあと思ひながら矢張りその生れつきというものは困るもので、石川さんのようになかなかまいりません。色んなことがありましたので話し出しますと長いこととなりますし、またついその何と申しますか…どうも石川君の話を…ここでするという事は私に取っては非常に辛い…心をかきむしられる様な思ひでございます。幸に石川さんの処は奥様、ご令息、ご家族皆さん立派なご遺族がお揃いでいらっしゃる。今後皆様にも…いろいろな形で石川さんのご遺族とも末長くお付き合いしていただけたらということをお私からも願ひたい。こんなことを私が願ひするのもし妙な話かもしれませんがそんな気がする次第で

ざいます。

どうも心乱れて十分な言葉をつくすことが出来ませんことをお許し戴きたいと思いません。

田 中 甫 氏

あの健康そのものの石川先生がなくなられて、早くも2ヶ月余りもたったとは全く夢の様に思います。

私は昭和19年秋、学部の2年のとき戦時中の動員で石川研究室に配属になり、以来30年にならんとする期間を石川先生のご薫陶をいただき今日に至っている者で、今更ながら先生には随分と御世話になったものだという追憶の思い出が一杯であります。多くの思い出の中で、3先生の人柄をしのぶ話をさせていただきます。

戦時中先生は陸軍燃料廠の研究で合成潤滑油の製造あるいは灯油の接触分解用触媒としていわゆる鹿沼土（われわれはこれを膠質土と命名していましたが）の研究の手伝いをし、そこで私もはじめて膠質土を知ったわけです。戦後この土の中心本体とその利用に関する研究をテーマとして与えられ、膠質土ばかりで毎日過したのですが、その間先生の膠質土に対する情熱にうたれ、ひきづられて、毎年の卒論生共々研究して来たわけであります。

この土を弱アルカリで処理し、さらに80℃で20%硫酸処理すると殆んどが溶解し、熱いうちに濾過した濾液は冷えるとゼリー状になり、プディングの様に固まる状態を先生自ら実験でみせて下さった昭和20年の暮の夜の情景など今でもありありと思い出されるものです。これは不思議な面白い土であるという印象から、私も膠質土に興味をもったわけです。

昭和22～23年頃のまだまだ世の中一般に苦しい時代にあって、先生はこんな時にこそ頑張るべきだと研究を強く推進され、出張旅費などもなかった中で、京都の学会に出張する私共に旅費を下されたのですが、あとで他の人から聞いたところによると先生が大学の会計からご自身の苦しい給料の中から前借りしていただいたものと判り、全く恐縮したこともありました。

若い時代に新潟から上京され新聞や牛乳の配達などされながら苦学力行されたいわゆる苦勞人であられ、困っている人には具体的に積極的に協力されたりする一方ご自身は至って質素な生活をされ、自分個人の利益はすべてあとまわしという考え方で、常々私共には「生活を派手にしようとするならば1日にして派手にも出来るが、一旦上げた派手な生活を引締めるのは容易なことではない」と戒められましたし、ご自身それを実践された方でもありました。

また辺幅を飾らない方で、昭和35年に学位を取得された折に、丁度来室した懇意の印刷屋に私は気をきかせたつもりで、先生に相談せずに学位を刷り込んだ先生の名刺を注

文し、出来上ったものを差し上げたところ、先生はめずらしく怒られ、「学位を取ったからといって俄かにその人が偉くなるものでもあるまいし、余計なことをしてくれた」と語気強く申されたことがありました。これなどは先生の信条がいわば人間第一主義の立場に常に居られたからだと思えます。

先生の夢であった膠質土工業は現在主として吸着剤の利用などが品川白煉瓦KKなどで企業化され、立派に役立つ製品として世の中に出ているわけですが、まだまだ先生の遠大な夢からみると十分でなかったことは先生としては残念なことだったと思えます。しかしながら一方、先生の下で卒論を行なった二百余名の卒業生は全国の職場で石川イズムを何かの形で発揮していることを思えば先生の教育者としての志は満たされたものと存じて居ります。

晩年の先生は、卒論生の集会などでしばしば「人生の中でどうか諸君はよい思い出を自分でつくるように努めて下さい、よい思い出が多ければ多い程、幸せな人生といえるだろう」と言われていました。その先生も今はなく、石川先生は私共の心の中にたくさんの「よい思い出」を残して天に昇られ、私共を温かく見守って下さっている様にも思えます。

先生のご遺徳をしのびつつ先生の御魂の安からんことを祈念するものであります。

最後に石川研究室卒業生一同に代り一言お願いがあります。急に石川先生がなくなられ直接の指導をうけた卒業生は俄かによりどころを失った思いがあります。どうか心のふるさと早稲田の杜に伺った折には、応用化学科の諸先生方は勿論、具体的には特に城塚先生以下の化工研の先生方には一層今後の御指導をお願い致しますと存じております。何卒よろしくお願い致します次第です。



追悼会（於大隈会館，昭和48年4月20日夜）

想い出の石川中隊長

樽 石 勇 蔵

私が石川先生を知りましたのは野砲兵第二聯隊第四中隊に臨時召集により入隊した昭和14年8月で石川先生は浅野部隊石川隊の中隊長をしておられました。私は石川中隊に入隊し翌年3月補充要員として戦地勤務のため仙台を離れて以来お会いする機会がありませんでしたが私共が出発してまもなく石川中隊長は召集解除になり再び早稲田大学で教鞭をとっておられることと聞きました。

たまたま昭和34年に石川先生と田中先生（現宇都宮大学教授）がご一緒に常磐炭鉱に来所する予定と聞きました時石川先生は当時の石川中隊長ではあるまいかと思いつつ到着の日をお待ちしていました。当日先生を拝見したときやはり思い通り中隊長であり往時とちっとも変っていらっしらず、なつかしさがこみあげてまいりました。

私は中隊長殿暫らくでしたとご挨拶いたしますと、はてどこの部隊で一緒でしたのかな、とご返事され（先生はその後再度の召集部隊があったので）、先生は常磐炭鉱と同じ隊員二人（他の一人は中島君、庶務課勤務）にも会えるとは、と本当に驚かれたごようすでした。その夜は先生のお仕事に支障のないよう心掛け早々に引揚げるつもりでおりましたが、楽しい思い出に深夜まで話がはずんでしまいました。そのなかで、私が今でも忘れることが出来ないものに中隊長の訓示の一部がございますと申しあげ、それは補充要員として戦地部隊配属のため出発するときの訓示でして石川隊長のもの静かなお人柄がにじみ出てくるような口調で話されたその一部です。

『皆もいよいよ征途につくことになった。身体には充分に気をつけて頑張ってくれ。

だが決して死を急ぐことはない、死んでのみ御国に尽す至上のものではなく、生きて故国に帰り、再び銃後の勉めを果してこそ立派な御国に尽す所以である。だからと言って卑怯な振舞をしてはいけない。これを心掛けて征ってくれ』

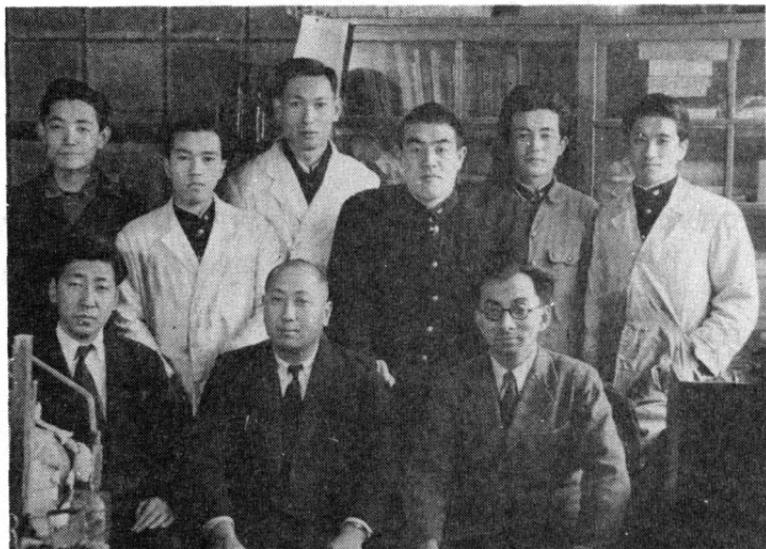
そのとき隣部隊の隊長の訓示は次のようなことだったと教えられたことを記憶しています。

『生きて再び故国の地を踏むと思ふな。立派に手柄をたて白木の箱に入れて帰り父母に目見える覚悟で征途につけ』

（これが当時の上官の部下に対する訓示だったのかも知れない）

以上のような訓示を心に秘して出発した隊員は石川隊では40人位でした。

いよいよ戦地に向う時の兵隊の複雑な気持で聴く訓示であるだけに30年経た現在でも忘れることができません。と申しますと先生は、そうゆうことを言うたかな。よく覚えていたね。と堂々たる体軀に目を細められて本当に石川先生の慈愛をしみじみと感じ



石川研究室（昭和28年）

石川先生の向って右が田中甫氏（現宇都宮大学教授）

左が横溝克巳氏（現早大理工工経教授）



お若い頃の石川先生御一家（昭和14年1月）

させられました。

その後数年して先生が常磐ハワイアンセンターにお出になられたときお会いいたしましたのですがそのときは大変お元気でいらしゃいましたのに……。

先生のお名前をきくたびごとにあの信念をもっておっしゃられた訓示とともに慈父にも似たお人柄が偲ばれてなりません。

甚だ拙文にて充分意を尽し得ませんが茲に石川中隊長を偲び只管ご冥福をお祈りいたします。

(石炭鉱業合理化事業団)

世界化学工業視察旅行での 石川先生の思い出

伊藤政勝

石川先生の突然の御逝去の報に接し嗟然としたのは一人私のみではなかったと思われる。

昨年御入院時に御見舞に伺った折も平生と何ら変らぬ先生に接し、その後退院され静養を兼ね熱海へ行かれ再び学校に出られるのも近いとのことで、御目にかかれるのを楽しみにしていた折のこととて、耳を疑わざるを得なかった。

先生の大学、学会等での御人柄をしのぶ思い出は夫々の諸先輩により述べられることと思われるので私として先生の影響に残る思い出としては先生にお供をして約60日間世界化学工業視察旅行に行ったことで今尚印象深く残っている。

この旅行は早稲田大学生産研主催で石川先生を団長として、生産研岩崎馨先生をリーダーとして、卒業生の就職せる各種会社に参加者を募られたもので、私も会社在职中ながら会社上司の理解と賛同を得て本旅行の一員として加わることが出来た。今を去る約10年前1963年初秋のことであった。

そこでこの旅行中のいくつかの先生の印象を記し先生の御人柄をしのびたいと思う。

その年9月早々朝9時羽田を離陸した日本航空のDC-8は定時ハワイ国際空港に着陸した。それ迄の約7時間半は先生も私も経験した最も長い旅であった。この間じっと坐っていることは仲々の苦痛でもあった。おまけに軽食を含め3度も食事をしたわけではいささかうんざりしてしまった。我々一行の中の誰もが席を立て狭い機内を運動の意味でトイレに立ったりスチュワーデスの席に話しに行ったりしたのだが、先生はあまり席も立たれず、座禪をくんだ僧のようであった。もっとも狭い席で先生のあの巨体(こんな表現を使わせて頂くことをお許し願って)では立ったり坐ったりは大変なことだったかもしれない。だからハワイでタラップを下りられる時はフラフラされたが、空港口

ビーでハワイ歓迎の挨拶であるポリネシア美人からレイを首にかけ頬にキスされたとき“いやどうも……”と腰をかがめ、私などの方を見て照れくさそうに笑われた。そして生パイナップルジュースのサービスを受けられた時、ヤレヤレと解放されたように言われて大きく伸びをされた。

それから1週間後テキサス、ヒューストンに滞在中、連日熱い中を精力的に回っていたので、ある夜は Down Town に行くのは止めて、夕食はホテルでとることにしたが、ありきたりのものでは面白くないということでウェイターにヒューストン名物料理をたずねたらテキサスチキンがよいということで注文したら1人前2羽の鶏をのせた量的なドラックス版であった。我々の中の殆んどがこれを全部処理するキャパシティはなかった。我々苦心惨憺の最中に先生は悠々と済まされてしまった。

シカゴ大学訪問の折、中国出身の揚教授と大学内のクラブで昼食をした時、我々のテーブルを扱ったウェイトレスが日本人女性であった。その当時で言う所謂戦争花嫁であったが、先生は何となく話しかけられ、いろいろ尋ねられていたようで、異郷の地にいるこの女性に同じ日本人としての思いやりをくばられていたように思われたのである。

ヨーロッパに渡りスペインに行った折、日曜日はスペイン国技である闘牛を見に行った。8回も4~500kgある黒牛が闘牛士の剣先に倒れたが先生は一言“残酷なものだね”と言われたが、その夜はフラメンコを見に行かれスペイン美女の印象を翌朝さかんに話され、前日とは変って明るくなられた。

パリはマロニエの葉が落ち始める10月初めで美しい時期であった。ニューヨークでもそうだったが先生は早稲町を歩かれていた。ニューヨークではセントラルパークであったが、パリではコンコルディアからシャンゼリゼ、セーヌ河畔まで行かれたようであった。旅行がお好きだった先生には秋のパリにたまらなくなられたのかもしれない。

ロンドンでは思いもかけぬ訪問者が先生をホテルに会いに訪れた。早稲田文学部出身でその時英国在日本大使館書記官夫人であったN夫人であった。学内解放の時研究室を訪れ先生が丁度おられて話しをしたことのある人であった。先生の御人柄がどこへ行っても、親しみを与えられることによるのかもしれない。勿論我々一行が行くことは知らされていたが、我々のうち誰も予知出来なかったことであった。

暗いロンドンの雰囲気にも明るい先生の思い出が残っている。

一ばん愉快だった思い出はエジプト、カイロの夜であった。エジプトの雰囲気にも溶け込み、エジプトのムードに浸るエジプトレストランに行った時のことである。

レストランというからには町中の繁華街のまん中にあるのかと思ったら、何とあのスフィンクスとケブオスピラミッドのある砂漠の近くであった。

エジプト料理を味わいつつ、エジプト音楽、魔術、そしてオリエンタルダンス等を観賞するのであった。

レストランそのものは円いキャラバンで豪華なカーペットを床や周囲に張りめぐらしてあり、サルタンのハレムを思わず雰囲気であった。エジプト音楽楽団のリーダーが、客の1人1人を引張り出し、何かやれというので我々の中の1人1人苦心惨憺のお付合をさせられた中で、先生は楽団員の1人から胴長の太鼓をかりてこられ、脇にかかえ音楽に合わせて三河万才さながら、ポンポン叩きながら愉快に踊られた。私どもには考えも及ばず大へん驚いてしまった。先生の大へん陽気な面を拝見した形になったのである。外は月夜で砂漠の中、月の砂漠で先生の太鼓の踊り、アラビアンナイトであり、一方また別の表現をお許し下さるなら、さながら月に浮かれた証誠寺の狸ばやしのようでもあった。

我々一行の最後の目的地は香港であった。一日九竜半島の各所を回った中でニューテリトリィのウォールシティと呼ばれる昔盗賊から村落を防御するために造られた銃眼のある高い壁で囲まれた部落に行った折、中は人間、鳥、獣など雑居の悪臭プンプンする狭路のめぐらされた、迷路地区であったが、そういう所でお決りのように訪れる人々に付きまとい物請いが多かった。その中で5~6才のお河童の可愛らしい女の子がいたが先生は立ち止り、香港貨幣の5セントを与え、そっと髪をなぜられた。御家族にお嬢さんが多かったので、その年頃の頃を思われたのかもしれない。父親としての思いやりの一端を拝見したように思われた。

60日間の旅行を通じて先生はどここの国でも接する人、1人1人に対し物柔らかく鄭重であられたと記憶している。

私の上記の断片的な印象の一端で先生のお人柄をしのばせるには未だ十分でないことは確かで、他方面での諸先輩、後輩諸兄姉の思い出話等でお願ひすることにした。最後に先生の御冥福をお祈り申し上げ本文を終らせていただきます。

(千代田化工建設(株)海外事業本部、旧31回卒)

先生サヨウナラ

倉田佳忠

「人は死んでチリに帰る。」と聖書はいう。肉体はチリになり土に還元されてしまうが、その霊は神のもとにいくという思想であろう。石川先生が亡くなられてすでに6か月近くの時間が流れたが、未だに私にはあの先生がチリになってしまったり、神のもと遠くにおられるなどということはとても感覚的に実感できない。先生のお宅に伺えば「やあ、来たかね。さあ二階に上がんなさい。」という特有の低い声で、今にも先生が玄関に微笑をもってお出になられるものとしか思えない。私ごとき出来の悪い門下生は

1年に2回か3回くらいしか直接にはお目にかかることがなかったけれども、電話や人を介して仕事上の御指導賜ることが少なかった。だから私の心には今もって、お訪ねすればいつでも先生がいらっしゃる筈なのである。それは先生に対する門下生の勝手な甘えに違いないのだが…。

息子の戦死公報を認めることができず、必ず帰ってくる筈だと思っている老母の記事がかって新聞に出ていたことがある。恐らくその老母も息子の死という現実には肯定しているであろう。親しい人、好きな人の死という事実とそれにある距離遅れてしかついでいけない人の心情とのズレは、理屈抜きにどうしようもないものようだ。

私は昭和30年石川研究室を卒業してから6年後に転職のため約1年余石川研で勉強させていただいたことがある。その頃研究室には田中先生（現宇都宮大教授）がおられ直接御指導を賜ったのも懐しい思い出であるが、石川先生の御研究テーマの1つが6年前の在学時のものであり、あれからずーっと継続されているのだなあと感慨深かったものである。同時に石の上にも10年といった先生の御研究態度に私はひどく感銘を覚えた。そのテーマというのは、膠質土原料のアルミ精製工程における鉄分の除去に関するものであった。もともと、先生の御研究は膠質土の特性とその工業的応用に関するもので極めて地味な分野なのであるが、当時石油化学の抬頭、発展が著しく華やかであったことを思うと、先生がそれらの分野に手を上げられないのは私の如き凡俗からは不思議であった。しかも、先生は以前ナフサの接触分解関係の研究もおやりになっていたと伺っている。売名とか功名心といった私欲の全くない先生は、そうした派手な世の風潮を追うような研究態度はミジンもなく、山門の前に立ちふさがる長い長い石段を一步一步登りつめていく修験僧にも似た御研究態度を矜持しておられた。私はその心にふれ全く敬服したものであった。このように、先生は人に物を教えるのに、御自分の態度でお示しになることが多かった。

研究者として自らの道に厳しく忠実に歩まれるというドイツ風の気風がおありであった反面、周囲の者、学生はじめ研究室のメンバーには、とても細かい思いやりがあった。学問の御指導にも、人生の手引きにも、先生は各個人の背景をよく見られて、1人1人それぞれかなり異った御指導をなされていたようである。数学・外国語等の得手不得手とか、外国からの留学生、在学中父を亡くした学生、会社から大学院に入る希望者等々人の背景はさまざまであるが、実にキメ細く先生は指導されていたものである。石川研究室に学んだ人達の中で、このキメ細い御指導を頂かなかった者は誰もいないであろう。

そうした先生だから、戦時中技術将校で陸軍燃料廠におられたが、やがて東京の帝都警備隊のような部署に回された時、部下に向かって「こんな戦争で死ぬな。最後まで生残るようにせよ。」と平気でいっておられたそう。当時職業軍人ならずとも、聞いたら気の遠くなるような話であったろう。物事に対する透明な洞察力だけではいけないお言

葉である。他人に対する思いやりというものは、本当に信念と勇気のいることである。多くの部下は無駄に命を落すことなく終戦を迎えることができたであろう。

他人の命の重さをよく考えておられた先生も、御自分の生命についてはどうであったろう。数年前のある日、死後の世界のことに話が及んだとき、「人は死んでしまえば、それはもう何でもなくなってしまいます。まあ土になっちゃうとでもいうか。」といわれたことがあった。偉い先生はもっと複雑な機構のお考えをお持ちだと思っていた私には、当時何のことかよく判らなかつたような、物足りなかつたような記憶がある。あとで考え直してみると、どうも「死後の世界など未練がましいことは考えるな。生きている今の命を大切にせよ。」ということをおっしゃったようであった。先生の「土になっちゃう」というお言葉は聖書の「チリに帰る」と重なり合つて、妙に私の耳から余韻が消えない。先生サヨウナラ。

(月島機械㈱ 技術部課長 新5回卒)

× ×

× ×

× ×

編集後記

暑い夏がやって来て、暑さに苦勞されていた石川先生の御姿が目に見えます。先日豊倉さんと一緒に御宅へお伺いいたしましたがお子様も御元気で悲しみの中にも冗談に笑いながらお話をされており安心いたしました。御宅の二階から見下せるようなところ(告別式の行なわれた清見寺境内)に立派なお墓も出来、お花が絶えることなく供えられておりました。

軍隊時代の御友人樽石様をはじめ卒業生の方々から貴重な原稿を頂きましたが、その際田中甫氏に一方ならぬお世話になりました。この欄をお借りして原稿を寄せられた諸氏および田中氏に厚く御礼申し上げます。

(佐藤 匡)

昭和48年7月 発行

発行 早稲田応用化学会
新宿区西大久保4 早大理工学部内

編集兼 佐藤 匡
発行人

印刷 堀越研究所
千代田区神田神保町2-20